

「曾我の里」  
 今は 冬もまたく 過ぎたり。  
 日あたりに  
 ひとしきりづ、降る  
 梅の花  
 『遠やまひこ』  
 釈 迢空

国学院大学 令和8年2月20日(金) 定期号(毎月20日発行) 1部20円  
 [発行]国学院大学 [編集]総合企画部広報課 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28 [電話]03(5466)0130 [FAX]03(5466)0528  
 祭儀 ■ 月次祭 3月2日(月) 午前10時 神殿 ■ 卒業奉告祭 3月21日(土) 午前10時 神殿

## 開設20周年を迎えた経済学部経営学科

# ヒトモノカネを研究する学問の (過去) (現在) (未来)

国学院大学経済学部経営学科は平成17(2005)年の開設から20周年を迎えた。本学経済学部は昭和41(1966)年に政経学部を経済学部第一部・第二部と改めてから、約60年にわたって時代の変化や社会課題に応じた教育を実践し、有為の人材を送り出してきた。中でも本学が強みとする実社会の第一線で活躍できる人材の育成という観点では、経営学科の存在も大きい。日本を代表する企業への就職や公認会計士、税理士など難関資格取得の実績も年々伸びている。

実際のビジネスを深く理解できるメリットがある。令和2(2020)年には学部改組が行われ、経済ネットワークキング学科を含めた3学科体制から経済、経営の2学科8コース体制に再編された。経営学科は1学年の定員が150人から255人へと大幅に増え、国学院大学ならではの「日本」を意識した教育をはじめ、主体的な学修を促す段階的・系統的なカリキュラムが整えられた。



東海林孝一 准教授

星野広和 教授

経営学は人が企業など組織を営み、社会をどう豊かにしていくのかを追究する学問だ。経済学や社会学、心理学など隣接分野も多い。本学経営学科の特色は経済学部の中に経済学科と併置され、幅広い学問分野を垣根なく学べることだ。経済学の知見を応用し、

4面に続く

## A日程入学試験 約1万6000人が志願



国学院大学の前期一般選抜入学試験であるA日程入学試験が2月2日から4日までの3日間にわたり実施された。志願者は約1万6000人と、昨年度より約400人増加。A日程志願者は5年連続の増加となった。

試験は渋谷・たまプラーザ両キャンパスに加え青山学院大学青山キャンパスにも会場を設置したほか、全国8都市(札幌、仙台、新潟、長野、静岡、名古屋、大阪、福岡)にも地方会場を設けて実施された。

渋谷・たまプラーザ両キャンパスの試験会場では寒空の下、受験生たちが入り口前の掲示板で受験票を片手に自身の受験教室を確認し、緊張した面持ちでそれぞれの教室に向かう姿が見られた。

試験は大きなトラブルもなく終了し、合格発表は14日に行われた。後期一般選抜入学試験であるB日程入学試験は、3月2日に渋谷・たまプラーザ両キャンパスで実施される予定。

## みはるかすもの

2月4日は「立春」である。暦の上では春の始まりを告げる二十四節気のひとつだ。そして、立春を過ぎると「雨水」という時期に移り変わる。雪が雨へと変わり、厳しい冬から春へと静かに変わり変わっていく頃を指すらしい。私はこの「雨水」の時期が好きだ。体感としてはまだ寒く、春の訪れを実感できる日ばかりではない。しかし、土の下では、生命が次の季節に向けて着実に準備を進めている。目には見えなくとも、確かな変化が積み重なっている。言わなければ、目覚める直前の段階なのである。

▼この時期、受験生は、晴れやかな春の季節が訪れることを信じ、大学受験に臨んでいる。大学4年生は、春から始まる社会人としての新たな生活に期待と不安を抱きながら、最後の充電期間ともいえる春休みを過ごしていることだろう▼大学4年生の中には、卒業旅行を計画している者も多いはずだ。これから別々の道に進む親友と旅をし、社会人になることへの不安を語り合いながら、普段は目にするこくない景色を眺める。そうした時間は、社会に出る自分自身を見つめ直す機会となるだけでなく、自分には、道が分かれても心が通い合う友がいるのだということ、改めて実感させてくれる。それはとても意義深い時間である▼受験生も、大学4年生も、それぞれの場所で大らかな花を咲かせるため、最後の仕上げをしている。さあ、準備を始めよう。君たちの春は着実に近づいている。

# 人間開発学部 学部長賞 16人を表彰



人間開発学部の理念に基づき、優れた実践活動を行った学生を表彰する「人間開発学部学部長賞」の表彰式が1月14日にたまプラーザキャンパスで行われ、16人が表彰された。写真。

今回の表彰では、地域住民向けイベントなどを実施したサークルでの活動や、個人で取り組んだボランティア活動、スポーツでの実績などが評価された。表彰式では太田直之・人間開発学部長（副学長、教授）から受賞者に表彰状と副賞、記念品が手渡されると、同席した教員から惜しみない拍手が送られた。

翌15日には受賞者と教職員が学部のこれからのについて話し合う「人間開発学部学生懇談会」を開催。参加した学生からは、学生同士の交流活性化や、グループワークのためのスペース確保など、さまざまな意見があがった。受賞者は次の通り。（敬称略）

- ◆初等教育学科▼  
4年▼杉浦冬雪▼  
3年▼伊藤蒼▼小宮愛香▼佐藤大空▼西山諒英▼2年▼長野正武
- ◆健康体育学科▼  
3年▼後藤美帆▼萩原柊子▼平尾彩乃
- ◆子ども支援学科▼  
4年▼佐藤光莉▼3年▼大槻結菜▼サキヤ花蓮▼高橋花怜▼山本楓雅▼吉崎菜々子▼2年▼田川桃香

# 大学院委員長特別賞 4人を表彰



大学院委員長特別賞の表彰式が1月14日、渋谷キャンパスで行われた。受賞者は、佐藤長門・大学院委員長（文学部教授）、高橋信行・法学研究科幹事（法学部教授）から表彰状と副賞を受け取った。写真。

同賞は優秀な学業成績を取った学生をたたえ、誇りをもって研究活動を継続してもらうために表彰を行う制度として創設された。

- 受賞者は以下の通り。（敬称略）
- ◆受賞者▼野口雄五（博前文2）▼岸澤美希（同1）▼木村俊哉（博後文3）▼友樹（博後法1）

# 就職活動支援イベントを開催

本学学生を採用する意向の強い企業を招いて実施する学内合同企業説明会が、1月30日にオンライン、2月9日と10日には渋谷キャンパス、12日にはたまプラーザキャンパスで開催され、延べ約2100人の学生が参加。約90社の採用担当者から企業紹介や選考についての説明がなされ、学生たちが熱心に耳を傾けた。

2月7日には、1~3年生に向けて、企業や自治体などで活躍する院友（卒業生）らがアドバイスするOBOG・内定者アドバイス会が渋谷キャンパスで開催され、延べ約450人の学生が参加した。当日は、全国各地から集った院友約70人と、就職活動を終えた4年生が参加学生へアドバイスした。

# 教派神道連合会との包括連携協定を締結

国学院大学（学長・針本正行）と教派神道連合会（理事長・宍野史生）は、包括的な連携のもと相互に協力し、双方の今後の発展に寄与することによって、より良い社会の創生を目指すことを目的に、相互連携および協力に関する基本協定を締結した。

- ◆連携・協力事項▼教育に関する事項▼研究に関する事項▼施設相互利用に関する事項▼人材育成及び相互支援に関する事項▼その他、本協定の目的を達成するために必要な事項

# 観光まちづくり学部 学部長賞 15人を表彰



観光まちづくり学部の設置理念に基づき、同学部生による優れた成果や活動をもたらした「観光まちづくり学部学部長賞」の表彰式が、1月14日にたまプラーザキャンパスで行われ、15人が表彰された。写真。

学部長（教授）から受賞者一人一人に表彰状と副賞が手渡され、「チームで活動に取り組む姿を見て、教員が授業を通して伝えたかった『みんなで一緒に取り組む』という姿勢を見事に体現し、成果を出してくれたと感じる」と受賞者をたたえた。受賞者からはそれぞれの活動を通じて得た学びや、今後の抱負などが語られ、参加した同学部の教員から温かい拍手が送られた。受賞者は次の通り。（敬称略）

- ◆観光まちづくり学科▼4年▼内田大翔▼林周▼鶏徳周▼境一真▼安藤那穂▼宮嶋花奈▼町田恵望▼鈴木美優香▼3年▼関優斗▼松岡健翔▼岡崎由佳▼橋口心▼伊藤愛梨▼鈴木敬太▼2年▼染谷彩乃

# 共通教育科目「共存・共生の思想（持続可能な社会への取り組み）」

## 学生たちがSDGsの視点で施策提言



この科目は認定NPO法人・開発教育協会のコーディネートによるアクティブラーニング型の授業で、持続可能な開発目標（SDGs）の理念を起点に、ジェンダーや貧困、食、気候問題などをテーマとして各分野の専門家をゲスト講師に迎えた授業を行っている。第11回以降の授業では、99人の受講生が5人程度のグループに分かれて大学における課題を検討し、学内でのフィールドワークなどを通して解決策を模索してきた。

当日は、グループごとに大学への施策提言を行った。約20グループが4チームに分かれ、太田直之副学長（人間開発学部長、教授）、榎剛・共通教育センター長（法学部教授）、星野光樹・学修支援センター長（神道文化学部准教授）、根岸毅宏・経済学部准教授（教授）、本科目を担当する苑田真司・法学部長（教授）らに向けて、調査内容と課題解決策を発表。提言内容は、フードロス対策やジェンダーレストイレの設置など多岐にわたる。出席した教員からは、実現可能性や調査内容について助言が寄せられた。学生たちからは「SDGsの視点で大学を見つめ直すことで多くの気づきがあった。自分たちができることは何かを改めて考え、改善策を実行していきたい」と前向きな声聞かれた。

# 国際交流送別会 交換留学生6人が修了



国際交流推進部が主催する国際交流送別会が1月23日、渋谷キャンパス有栖川宮記念ホールで開催された。写真。留学期間を終える大学院交換留学生1人、K-STEP交換留学生2人、同科目等履修生3人を送るセレモニーに、学生・教職員ら約40人が参加した。

初めに、交換留学生の授業を担当した星野靖二・研究開発推進機構教授が「留学を通して同じ空間で同じ経験を積み重ねてきたことは大きな財産になる」とあいさつ。続いて、留学生一人一人が壇上に上がり、田原裕子・国際交流推進部長（経済学部教授）から修了証が授与された。交換留学生たちが「皆さんのおかげで充実した時間を過ごすことができて楽しかった」など日本語でスピーチすると、会場から温かい拍手が送られた。

最後は、エリック・シッケタンツ・神道文化学部准教授が「皆さんが得たたくさんの経験、楽しい思い出とともに上達した日本語を大切にしてほしい。おめでとう」と英語でエールを送り、交換留学生代表2人の音頭による三本締めが行われた。

# 令和7年度補正予算成立

令和7年度学校法人国学院大学補正予算は、2月13日の評議員会への諮問を経て、同日の理事会において決定、成立した。

## ◆事業活動収支補正予算

事業活動収支は、当該年度の①教育活動②教育活動以外の経常的な活動③前記以外の活動―以上三つの活動に対応する事業活動収入及び事業活動支出の内容を明らかにすることを主な目的として

## ◆資金収支補正予算

資金収支の内容は、会計年度中

のすべての収入および支出の内容と支払資金の期末を明らかにすることを目的としている。本補正予算総額は31億8,350万円で、当初予算額対比24億1,800万円の増額となった。収入面では、多子世帯への支援拡充を含む高等教育修学支援新制度の影響により補助金収入が増加する見込みである一方で、支出面においても同額の奨学金を計上しており、法人全体の収支に影響を与えない。詳細は、学校法人国学院大学HPに掲載している。(財務部経理課)

## 事業活動収支補正予算書

令和7年4月1日から令和8年3月31日まで (単位：百万円)

事業活動	収入の部			支出の部				
	科目	補正予算	予算	科目	補正予算	予算		
事業活動収入の部	学生生徒等納付金	15,101	14,572	529	資産売却差額	0	0	0
	手数料	727	728	△1	雑収入	0	0	0
	寄付金	173	294	△121	その他の特別収入	33	44	△11
	経常費等補助金	4,191	3,268	923	特別収入計	33	44	△11
	付随事業収入	192	171	21	資産処分差額	1	0	1
	雑収入	365	270	95	その他の特別支出	626	0	626
	教育活動収入計	20,749	19,303	1,446	特別支出計	627	0	627
事業活動支出の部	人件費	11,158	10,450	708	特別収支差額	△594	44	△638
	教育研究経費	8,021	6,623	1,398	【予備費】	271	294	△23
	管理経費	1,548	1,573	△25	基本金組入前当年度収支差額	△552	628	△1,180
	教育活動支出計	20,727	18,646	2,081	基本金組入額合計	*△1,268	△1,402	134
教育活動収支差額	22	657	△635	当年度収支差額	△1,820	△774	△1,046	
事業活動収入の部	受取利息・配当金	256	179	77	前年度繰越収支差額	△9,576	△10,886	
	その他の教育活動外収入	50	50	0	基本金取崩額	17	0	
	教育活動外収入計	306	229	77	翌年度繰越収支差額	△11,379	△11,660	
事業活動支出の部	借入金等利息	15	8	7	(参考)			
	その他の教育活動外支出	0	0	0	事業活動収入計	21,089	19,576	1,513
	教育活動外支出計	15	8	7	事業活動支出計	21,641	18,948	2,693
教育活動外収支差額	291	221	70	※■第1号基本金…教育の質向上のために取得した固定資産の価格				
経常収支差額	313	878	△565					

## 資金収支補正予算書

令和7年4月1日から令和8年3月31日まで (単位：百万円)

収入の部				支出の部			
科目	補正予算	予算	増減	科目	補正予算	予算	増減
学生生徒等納付金収入	15,101	14,572	529	人件費支出	10,647	10,540	107
手数料収入	727	728	△1	教育研究経費支出	6,212	4,874	1,338
寄付金収入	175	298	△123	管理経費支出	1,443	1,436	7
補助金収入	4,217	3,303	914	借入金等利息支出	15	8	7
資産売却収入	0	0	0	借入金等返済支出	600	600	0
付随事業・収益事業収入	242	222	20	施設関係支出	796	1,049	△253
受取利息・配当金収入	257	179	78	設備関係支出	554	505	49
雑収入	365	270	95	資産運用支出	3,130	2,395	735
借入金等収入	600	601	△1	その他の支出	600	433	167
前受金収入	2,840	2,719	121	予備費	271	294	△23
その他の収入	1,852	1,974	△122	資金支出調整勘定	△668	△483	△185
資金収入調整勘定	△3,129	△3,108	△21	当年度支出合計	23,600	21,651	1,949
当年度収入合計	23,247	21,757	1,490	翌年度繰越支払資金	8,235	7,766	469
前年度繰越支払資金	8,588	7,660	928	支出の部合計	31,835	29,417	2,418
収入の部合計	31,835	29,417	2,418				

## インフォダイジェスト

…在学生 …保証人 …卒業生 …一般 …受験生  
内容 日 時間 場所 対象 定員 料金 申込み 問い合わせ

## 大学からのお知らせ

### 国学院大学生協への出資金返還

生協加入時にお預かりした出資金の返還手続きを開始します。令和7年度の手続き詳細は生協HP (https://www.kgucoop.or.jp/henkan2.html) をご覧ください。返還期限は令和10(2028)年2月末です。期限内での返還手続きをお願いいたします。

3月3日(火)~  
令和7年度卒業生  
生協事務所 (☎03・5466・0165)

### 博物館

料無料 時10~18時(最終入館17時30分)。下記企画展開催中は不定休。開館状況を博物館HPで確認ください。※博物館関連イベントの問い合わせは☎03・5466・0359

#### 企画展「和の硯 - SUZURI -」

本展では、硯の中でも日本の硯、「和硯」に注目し、その魅力に迫ります。国学院大学で教鞭をとられた故佐野光一教授が蒐集した純国産1500面の中から厳選した約200面、江戸時代から現代のものまで、全国26産地の硯が並びます。中国で生まれ日本に伝わった硯は、1300年以上の歴史をもち、材質や大きさ、装飾などさまざまに変化していきました。日本の石硯について、ここまでの種類と点数をご紹介します。展覧会は国内初となります。ぜひ「和の硯」の世界へ足をお運びください。

3月7日(土)~5月10日(日)  
場博物館企画展示室

### 読者アンケート

本紙へのご感想をお待ちしています

『国学院大学学報』では、読者の皆さまからのご意見・ご感想を募集しています。今後の紙面作りの参考にさせていただきますので、以下(二次元コード)のフォームから、ぜひご協力をお願いいたします。昨年度のアンケート結果は、学報バックナンバーページ (https://www.kokugakuin.ac.jp/about/efforts/p20) でご確認ください。

広報課 (☎03・5466・0130)

## 神道と古典と

明治15(1882)年に開校した皇典講究所は、神道と国学を学ぶ学校、いわば神職養成と古典研究を担う学校であった。皇典講究所の課程には、文学部(知育)・作業部(体育)が設けられた。文学部では「専ら典籍に就いて学術を研究」すべく、修身・歴史・法令・文章の4学科が置かれた。修身科では「専ら我が古典を教授」するものとされ、道徳教育たる修身は、古典と深く結びついていた。皇典講究所の寄付行為第三条では、「…典故文献ヲ研究シ…」とあったが、戦後に皇典講究所が発展的に解消され、財団法人国学院大学として独立したときに寄付行為第三条は「…古典ヲ講究シ、神道ヲ闡明シテ日本文化ノ神髓ヲ顕揚シ…」とされた。寄付行為に「古典」が明文化されたのはこのときであり、「神道」の記載も戦後からである。これらは、現在の本学の学則第一条の「本学は神道精神に基づき人格を陶冶し…」、学校法人国学院大学寄付行為第三条の「古典を講じ神道を究め汎く人文に関する諸学の理論及び応用を研究教授し…」という条文へと展開してきた。本学にとって神道と古典研究が重要な位置づけにあることは言うまでもない。

明治21(1888)年に、憲法公布や国会開設が間近に迫ってくるなか、司法大臣の山田顕義と憲法や教育勅語の起草にも与っていた井上毅は皇典講究所の役割を重視し、その拡張のため、同所規則の改正を行う。「百年史」による

研究開発推進機構 准教授 渡邊卓

夫大道者存于神典矣。心潜于神典。可貫道之蘊奥也。古人有言。以

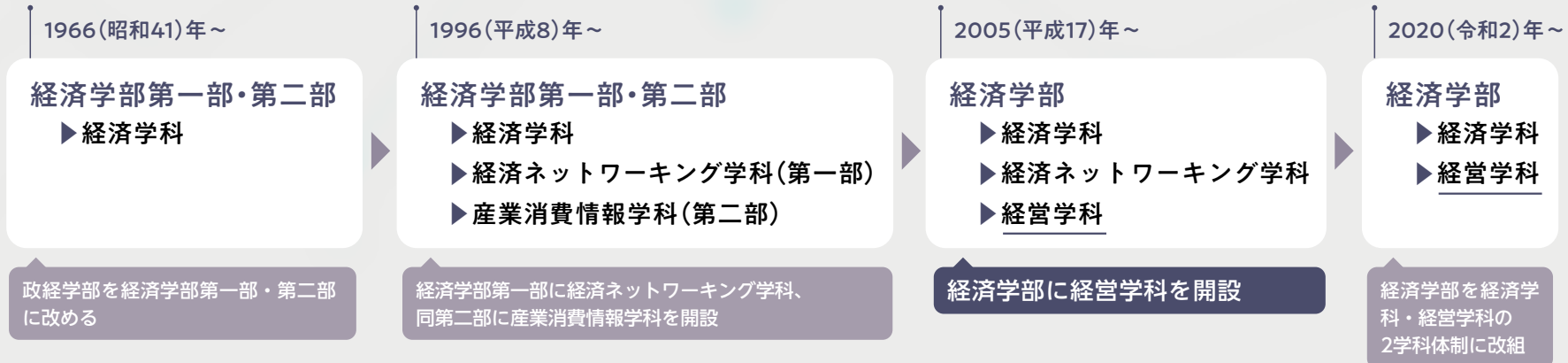
と、「古典を本として信拠すべき歴史を明らかにし、我が道とする国家の基を講じ、皇室の尊厳なる所以と国民が今日まで経歴して来た由来とを講究し、時勢に即応する施策を樹てようと企てた」とある。山田は初代皇典講究所所長となり、拡張計画を実施し明治23年に国学院が開校した。

国学院の校名は近世の「国学」に遡る。本居宣長「うひ山ふみ」では、「古事記」「日本書紀」のほか宣長の著作を読むようにとしながら、その他に「古語拾遺」「万葉集」「続日本紀」などの六国史、「宣命」「延喜式」「姓氏録」「和名抄」など、数々の古典を列挙している。宣長は、学問は神の道に通じているとし、学びに必要な古典を「神典」と称している。宣長に影響を受けた平田篤胤も「童蒙入学門」で、「夫れ大道(神道のこと)は、神典に存す。心を神典に潜めて道の蘊奥を貫くべし」と述べる。皇典講究所・国学院では、平田派の国学者たちが教壇に立ったが、道を説くために古典を重視する姿勢は江戸期由来の本学の特徴である。

皇典講究所開校式において、有栖川宮職仁親王から賜った告諭の一文「凡學問ノ道ハ本ヲ立ツルヨリ大ナルハ莫シ」は、本学の建学の精神の基底をなす。本年は職仁親王薨去後、140年にあたるが、告諭に示された指針は、近世の潮流を受けつつ、現在の国学院に受け継がれているのである。

開設20周年を迎えた経済学部経営学科

### 経済学部のあゆみ



### 経営学科開設20周年

## 東急ホテルズ&リゾート・武井隆社長(院友)が記念講演 「ホテルを旅の『目的地』に」



「経営学科20周年記念講演」が昨年12月14日、渋谷キャンパスで開催されたII写真。本学院友(卒業生)で同年6月に東急ホテルズ&リゾート株式会社取締役社長に就任した武井隆氏(昭63卒・96期経)が「変わらぬ視点から」と題して講演し、大教室を埋めた学生や父母、院友らが熱心に聴講した。

武井氏は昭和63(1988)年に株式会社東急ホテルズ(現東急ホテルズ&リゾート)に入社し、ベルボーイなど現場勤務を経て、平成3(1991)年に本社総務部総務課に異動した。「デスクワークは絶対自分には合わないと思っていたので最初は悩んだが、総務課の仕事は何でもあり。さまざまなことを聞かされたり頼まれたりしているうちに、一緒に働いている会社の人が私の「お客様」だと考え方が変わり、仕事が楽しくなった」と振り返った。

平成18年からは店舗開発プロジェクトのリーダーとしてホテルの成長戦略を担い、全国12カ所のホテル立ち上げに携わった。その間に遭遇し

たのが、平成25年の東京五輪招致決定をきっかけにしたホテルの出店ラッシュだった。「他業種が参入し、泊まるだけのホテルの乱立が目に見えてきた。お客様から『ここに泊まりたい』と指名されるようなホテルをつくらなければならない」と武井氏は述べた。そこで始めたのがホテルを「目的地」にする取り組みだ。その一つが平成30年にオープンした、多摩川を挟んで羽田空港の対岸にある川崎キングスカイフロント東急REIホテル。武井氏は「観光地からは離れた立地だが、そこでヨガをやるとか、自転車やマウンテンバイクで遊ぶとか、目的地にすることでお客様が集まり、現在の稼働率は90%を超える」と話し、他社との競合の中で差別化の重要性を強調した。

講演では変遷を続ける渋谷の未来像も語られた。東急グループは「広域渋谷圏(Greater Shibuya)構想」のもと再開発を行っている。一見ランダムな街の変化は戦略的に裏打ちされていると武井氏は話し、「線路の引き方、つなぎ方一つで人流が変わる。まず交通インフラが整えられ、人が集まってくる街がつけられる」と普段は意識しにくい観点を指摘した。

講演後の質疑応答では、渋谷を「通過型」から「滞在型」の街に変える方策についての質問を受けて武井氏は「ナイトエンターテインメント」と「体験」という二つのキーワードを示し、「ホテルという安全性が保たれた空間に魅力的なナイトスポットをつくらせていくこと、日本でしか体験できないコンテンツを増やすことを考えている」と回答。さらに外国人観光客にとって「一番行きたい街」である渋谷を日本の旅行のハブ、すなわち「起点」と捉えることも重要だと述べた。

### ゼミ成果発表会

## 学生たちがゼミでの学びを発表



経済学部ゼミ成果発表会が、昨年12月14日に渋谷キャンパスで開催されたII写真。この発表会は、学科や学年の枠を超え、専門分野の異なるゼミごとに取り組んで取り組んでいる成果を発表し、意見や情報の交換を通じて知識を深め合うことを目的として、毎年開催している。

今回は経営学科20周年記念講演と同日に開催され、普段のゼミ活動で行われている研究発表と、本年度の共通課題「成長」に基づくテーマ発表の2種類の発表が行われた。11のゼミに所属する2、4年生からなる41チームが参加し、商店街の衰退や公園の再整備といった社会的な課題に対する解決策の提案や、企業と合同で取り組んだ調査研究の成果などについて発表を行った。発表後には教員や学生らから質問が飛び交う、白熱した議論が行われた。

各ゼミの研究内容や雰囲気を知ることができるとあって、会場にはゼミ加入前の1年生や学生たちの家族も多数訪れ、学生たちの発表に熱心に耳を傾けた。

## 経営学科の20年を語る

東海林孝一  
准教授

二人の  
キーパーソン  
に聞く

星野広和  
教授

## 経営学科の

# 歴史と未来

しょうじ・こういち  
修士(経営学)。専門は管理会計、原価計算、予算管理。青山学院大学大学院博士後期課程単位取得満期退学後、1991年より本学。主な著書に「原価計算テキスト(改訂版)」(共著、東京経済情報出版、1994年)などがある。

ほしの・ひろかず  
博士(経営学)。専門は経営管理論、経営組織論、経営戦略論。東北大学大学院経済学研究科経営学専攻博士課程後期修了後、2008年より本学。主な著書に「経営学の基本視座—河野昭三先生還暦記念論文集—」(共著、まほろば書房、2008年)などがある。

「経営学科が開設された当時の経緯をお聞かせください。」  
東海林 私は本学経済学部を卒業し、平成3(1991)年に教員になりました。平成3年当時は経済学科のみの1学科で経済または経営に寄せた履習が行われていました。経営関連科目の履習が多く、もともと潜在的なニーズがあったと言えるでしょう。その後、経済ネットワーク学科(第一部)、産業消費情報学科(第二部)が開設されましたが、昼夜開講制への移行と相まって、産業消費情報学科(平成13年に募集停止)のコンセプトを生かしつつ、平成17年に経営学科が誕生しました。私たちの学科開設の意図が伝わりやすいように、名称はオーソドックスに「経営学科」とするよう教授会でも私は強く訴えました。

20年間を振り返ると？  
東海林 学生の皆さんの学力が伸びてきていると感じます。最近では公認会計士試験に在学中、それも3年次に現役合格するケースが増えています。それに伴って入学試験の難易度も上昇してきました。

星野 教授は学科創設期、平成20年の着任ですね。  
星野 その頃の「経営学科」はマネジメントと会計情報という二つのコースに縦割りでカリキュラムでした。「ヒトモノ、カネ」の動きを総合的に捉える経営学として社会のニーズに応えるべく、令和2(2020)年の学部改組で経済、経営の2学科体制にし、各専門分野に横断を刺すように、しっかりとした積み上げ型のカリキュラムにするなど環境を整備しました。

令和3年には経済学部長に就任し、改革を着実に実行へ移されました。  
星野 歴史、数学、統計なども含む基礎科目を学科問わず必修化し、1年次必修科目の基礎演習では課題解決型演習(PBL)も積極的に取り入れられました。そうして培った教養を1階とすると、2階部分で学科の専門性を高めたいと思います。さらにその上に主体的な学びがあり、その集大成が卒業論文です。現在のカリキュラムでは、2年後期から所属するゼミで卒業論文を必修としますが、その場合は卒業リポートを課しています。以前はゼミに入る学生は5、6割程度でしたが、今では約8割の学生がゼミで学んでいます。

東海林 私のゼミでは必修化される前からゼミで卒業論文を提出してもらっています。学生は卒業論文に向き合うことで大きく変わります。卒業論文の材料を集めるのにスマホのネットワーク二ユースではとても足りず、知識を深掘りする必要があり、テーマについて自分を持っていくイメージと実態が違ってくる気がします。そこから学生はどんどん成長し、4年生になってから成長する学生も大勢います。

国学院大学ならではの経営学科の特長、強みは何でしょうか。  
星野 まず、経済学科と一緒で経済学部の中にあることが大きいと思います。最近の経営学は経済学やゲーム理論といった行動経済学の知見をマーケティングや経営戦略等に取り入れていますから、経済学の幅広い分野を学べるのが強みです。また、建学の精神を超えて履修できるのはメリットです。また、建学の精

神にもつながる「日本」を意識した教育を学科のポリシーに含んでいます。例えば、1年次には「日本の経済」という必修科目があります。現在はグローバル化の時代ですが、学生にはまご身近な日本の経済、経営の仕組みを知り、それを基礎として海外に目を向けてもらいたいと思います。

東海林 その意味で「渋谷にある大学」というメリットは非常に大きいと思います。大学は渋谷と一緒に成長していると言えるでしょう。今年度の「基礎演習B」という科目では東急ホテルズ&リゾート株式会社とコラボして、渋谷を「滞在型」の街にするアイデアなどを1年生が考え、プレゼンテーションをしました。街の発展を傍観者として眺めるのではなく、「基礎演習B」などのPBLを通じて、経済、経営がダイレクトに自分たちの生活に関係している意識が持てるのは本学の強みです。

DX(デジタルトランスフォーメーション)化や生成AIの台頭など社会が激変する中で、経営学科に求められる役割は？  
星野 今回の学生は効率重視というから、分からないことはすぐにスマホで調べて答えを見つけてきます。しかしスマホを全員が持っているなら、そこに競争力は生まれません。社会に出ると他人との差別化が求められます。組織で働く時に必要なコミュニケーション力や誠実さなど、ユニークな力や力、そして失敗しても次に踏み出す力といった、いわゆる「人間力」が大切になります。人と人のぶつかり合いを経験して、課題解決のスキルを磨く場にしてほしいと考えています。

最後に学生と卒業生、そしてこれから本学を目指す高校生へのメッセージをお願いします。  
東海林 卒業生によく言う言葉は「他人から必要とされる人間になれ」です。大学を卒業して産業に例える人がいますが、私は「メーカー」だと思っています。次の時代を担う人材を育てる製造業と。新入生を立派に育て、社会に必要とされる人材として卒業してもらおう。私はそのために多大な時間を費やしています。それが私たち大学教員の使命だと思っています。

星野 学問を自分のスキルアップと成長のために修めるのももちろん大事ですが、社会のためにも学問という側面もあります。さまざまな社会課題を一人で解決しようと思わず、皆を巻き込み、周りに良い影響を与える。それがゆくゆくは企業や社会への貢献につながると思います。現代社会では、単なる知識、スキルなことでも得られますが、そうではなく教員や他の学生と人間力を磨き合える環境で学んでほしいと思っています。その気概を持った人を本学は喜んで迎えます。また、そうした先人を温かく受け入れ、支援する先輩、院友でいてもらいたいと強く願っています。



K:DNA —— 創立144年を迎えた国学院大学の「遺伝子」…個人・個性を尊重する校風 若いエネルギーが未来を変える

## 教員と築き、地域を支える。 支援学生の会「ちーへる」代表が語る学びの形

宮下拓斗さん(健体4) 後藤美帆さん(健体3)



人間開発学部開設当初から、教員たちの手で大切に育まれてきた取り組みがある。学生や教職員、そして地域住民の健康づくりを支援する「地域ヘルスプロモーションセンター」だ。長らく教員主体で運営されてきた本センターだが、ここ数年は学生たちも積極的に運営に参画している。今回は、支援学生の会「ちーへる」の代表として活動をけん引した宮下拓斗さん(健体4) =写真左=と後藤美帆さん(健体3) =同右=に、活動内容やそこから得られた学びについて話を聞いた。

地域ヘルスプロモーションセンターは、平成22(2010)年2月に設立された。中高年を対象とした栄養チェックや体力測定を行う〈たまプラウェルネスアカデミー〉、幼児・小学生と体を動かすゲームを楽しむ〈わくわく企画〉、同センター最大のイベントである〈地域交流スポーツフェスティバル〉など、地域の幅広い年齢層を対象に年間約8回の催しを開催している。同年に立ち上がった大学公認部会「支援学生の会」も、現在では「ちーへる」の愛称で学内外に浸透している。

「ちーへる」では3年生で団体の代表を務めた学生が、その経験を生かし4年生でスポーツフェスティバルのリーダーを務めることが慣例という。令和6(2024)年度に「ちーへる」の代表学生を務めた宮下さんは、「スポーツフェスティバルは、私たちの活動の集大成といえるもので、人間開発学部の学生や体育連合会に所属している部会にも協力してもらい、毎年10以上のブースを設けています。私がリーダーを務めた今年度は10周年にあたり、アスリートをゲストに迎え実技指導してもらい、他の企画も相まって大盛況でした」と語る。

「ちーへる」には、現在約70人に上る学生が参加している。代表学生は各イベントの主要担当学生を支え、全てのイベントに関わる。学生の専門や興味、熱量はさまざまだが、担当以外のイベントに参加して予想外に楽しさを感じ、関心が高まる場合もある。イベントに関わる学生たちに一歩踏み出してもら

工夫や、モチベーションのケアも役目だという。現在は、みんなをけん引する二人だが、参加のきっかけを聞くと「サークル感覚で参加したのですが、自分たちで考えたことを実現し、届けることの楽しさや達成感が加速度的に大きくなりました。自分たちにしかできないことをやっている実感があります。参加者から感謝の言葉をいただけた時にやりがいを感じています」と宮下さん。

令和7年度「ちーへる」の代表学生を務めた後藤さんは、「1年生の時にスポーツフェスティバルを手伝い、地域との交流が楽しくて、2年生になって正式に参加しました。代表学生を務めることは挑戦でしたが、スポットライトを当ててもらえる機会が増え、人間開発学会での発表も任されるなど経験できることが圧倒的に増え、充実しています」

二人とも小さなきっかけから、大きな経験を得た。特に宮下さんが入学した年は、新型コロナウイルス感染症の流行による影響が残る中で、イベントの企画や集客面では苦労の連続だった。広報を任された宮下さんが周囲を巻き込みながら試行錯誤し、地域への働きかけを続けた結果、現在では定員はすぐに埋まり、外部からイベントの依頼が寄せられるまでになった。

そのバトンを受け継いだ後藤さんは、「質を高めていくことが私たちの役目です。イベントには正解がないので、何らかの課題はでてきますが、それを引き継いで取り組むことが大切。より良い方向を目指し

ながら柔軟な姿勢で自分たちの色を追求していきたいと考えています」と語る。イベントでは毎年新しい遊びを考案し、ネーミングやロゴに工夫を凝らして視覚的な訴求にも力を入れている。「デザインやイラストなどが得意な学生が各自の能力を発揮できることも『ちーへる』の魅力だと感じています」と話す。

15年もの歴史がある「ちーへる」の活動に携わって思うことは「たまプラザという地域の良さもありますが、これほど地域と密接に関わり、共に成長できる環境は、この大学ならではの大きな魅力だと実感しています。このつながりは大事にしていってほしいです。また、活動を通じて先生方と密にコミュニケーションをとることができ、知見が広がります。そうした刺激は『ちーへる』ならではのです。参加してくれる学生がさらに増えてくれたらうれしいです」と宮下さん。

「デジタル時代だからこそ、地域や先生方、仲間とのつながりを大切にしたい。そして、イベントの成功以上に大切なものは、『ちーへる』が受け継いできた人と人とのつながりや、その温かさだということ。責任を持って伝えていかななくてはならないと感じています」と後藤さん。

積み重ねてきた地域とのつながりは、国学院大学の財産であると同時に、「ちーへる」の代表学生を務めた二人にとっての勲章でもある。「ちーへる」の活動を通してしか得られないかけがえのない学びを、より多くの学生が経験してくれることを願う。

### 7面より 第21回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト

地域民話研究部門(個人) 最優秀賞

## 室伏半蔵伝承からみる社会事業と日蓮宗

渡邊正太郎さん(静岡・富士高3年)

私は高校を通じて地元の歴史民俗に関する論文やレポートを作成してきた。高校2年の3学期より、それらの加筆修正の作業を始めましたが、その過程で、かつてこのコンクールに応募した「杉田用水」という生活用水に関するレポートに登場した「室伏半蔵」という人物に関心を持った。そこで、あらためてこの人物を深掘りしようと考えたことが研究の動機である。

研究対象とした「室伏半蔵」という人物は、富士郡久沢村(現静岡県富士市鷹岡地区)において酒屋を営んでいた豪農である。久沢村やその周辺に、現存するだけでも二十基程度の石造文化財を建立した篤志家でもあった。

半蔵に関する口伝は、特に彼が建立した「道しるべ」を軸に語られることが多い。半蔵が郷土史研究において脚光を浴びた終戦直後から現在に至るまで、郷土史家によって彼に関する論考が発表されてきたが、いずれも道しるべに焦点を当

てたものであった。研究の先駆者は「室伏の公共に尽した仕事の詳細を調べたい」と思ったが、記録がなくてわからないのは遺憾の極みである」と記している。そこで本稿では、口伝や石造文化財、そして半蔵の出自や宗教的活動に関する史資料をもとに、篤志家として伝承に名を残した室伏半蔵という人物の社会事業と、その背景にある日蓮宗との関わりについて、研究を行った。

室伏半蔵は、久沢村の東方に位置する東宗高村の石田家の三男として、明和7(1770)年に生まれた。室伏家分家に婿養子に入る際、石田家から酒造道具一式を持ち込み、莫大な利益を上げたといわれている。半蔵は、酒造業による余剰資金を、石造文化財の建立や富士山南麓の新田開発に充てていた。

半蔵が熱心な日蓮宗信徒であったことは、地元の日蓮宗寺院の住職によって揮毫されている、彼が建立した石造文化財からもみ

とができる。半蔵の末裔宅には曼荼羅が保存されていたり、複数の日蓮宗寺院の役員を務めていたりしたことから、日蓮宗関係者との太いパイプを持ち合わせていたといえる。

半蔵の日蓮宗に対する姿勢や思想的背景には、彼の出自も関係していた。生家である石田家の歴代当主にあっては、由緒書より日蓮宗に関する活動を確認することができ、室伏家については、本家は鎌倉時代から代々日蓮宗を信仰した名門であったことを示す記録がある。両家ともに熱心な日蓮宗信徒の家系であったことが、半蔵の熱心な日蓮宗信徒としての活動に影響を及ぼしていたであろうことは容易に想像がつく。

半蔵が人々に貢献するために行った社会事業は莫大な出費を要するものだったが、日蓮宗に対するあついで信仰心と、酒造業に裏打ちされた経済力によりそれが成し遂げられたといえる。また、富士郡には半蔵のほかにも深沢安兵衛、仁藤春耕という人物により建立された道しるべが現存する。安兵衛―半蔵―春耕の順に影響を及ぼし、系譜が続いていたことから、今後はそれらの検討も行う必要があると考えている。

### 高校生向けコンテスト「入賞作品集」を刊行

今回のコンテスト入賞作品を掲載した「全国高校生創作コンテスト入賞作品集」と、「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト入賞作品集」を2月下旬に刊行します。両作品集は、お一人様各2部まで無料配布いたします。発送をご希望の場合は、希望部数と送付先を左記までご連絡ください。

作品集は、創作コンテストの短編小説部門は佳作までの作品を、現代詩・短歌・俳句の3部門は入選までの全作品を収録しています。なお、今号掲載の「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストのレポートは作品集に掲載する文章を再編集したものです。詳しくは作品集をご覧ください。

国学院大学新聞社コンテスト事務局  
〒404-2724 静岡県静岡市清水区  
〒404-2724 静岡県静岡市清水区  
TEL: 054-2724-2750